

姉ラブ変態弟は知能高すぎ
スイスで
教師に呼ばれたが、

上級国民に姉が大学時代集団強姦されて、娘退学、育轢き殺されて、JS姪を押し付けられたら

著者・ろっきゅん

メーデーエロい子だった！



諭教新人輩後
佳梨友葉若



教え子:日野森アカネ



お元気娘
教え子: 松江由美



海道稀阿



ると、ツカツカと部屋に入って扉をしめてしまった。

「ちよっと、ちよっと華乃ちゃん。違うんだ！ 誤解だ！ 解った！ 俺の負けだ！ 正直に言う。言います！ 言わせてください！ その漫画も雑誌も全部自分の意思で買いました！ しかもその雑誌類、児ポ法前の貴重な雑誌とDVDで、正直に言えば今ではお宝なんだ！」
なにか中でゴソゴソする華乃が再び出てきた。だがその手には既に何もなくて……華乃がこれ以上ないくらいの満面の微笑みを浮かべた。稀阿の頬に一筋汗が垂れていく。

「稀阿、年頃の子と暮らすんだから、もうあんなの見ちゃダメ。絶対見ちゃダメ！ 今後お風呂で華乃の裸みるんだから、あんな雑誌とか漫画いらないでしょ。卒業して」

「そ……そんな……」

「それに華乃、漫画全部読んだけど、あんな風に簡単にやらしてくれる女の子なんかこの世にいないから。エロDVDで男と女がエッチしてるのも見たけど、全部男の都合の良いように作られた創作物だから。現実と幻想をすっかり区別してください。まあ、良い性教育の勉強になりました。……この変態叔父さんめ」

吐き捨てるような華乃の台詞に、思わず稀阿は蒼褪める。そんな稀阿に止めがさされた。

「あ、そうそう。言い忘れてた。棚にあった煙草の山んだけど、あれ全部捨てていたから」

「煙草の山？……って、え、煙草!? 嘘!？」

そう言っ煙草を置いてあったリビングの棚、煙草置き場を見ると十カートンあった煙草が全部消えていた。ライターや灰皿ごと。

「どこいつちゃったの俺の煙草!？」

「稀阿、小学生が同居してるのに、煙草吸う気だったの?」

「いや、ベランダで吸うから!？」

「煙が衣服につくからやめてほしい。というか、良い機会だから禁煙しなよ。将来肺にニコチンがタールみたいになへばり付いて、肺に穴開けて、呼吸困難起こして、もだえ苦しみながら死ぬことになるよ」

確かに小学生と生活するのに煙草は如何な物か。しかも恐ろしい事を言われた気がする。

何もかも正論。そもそも女子小学生とSEXしてる漫画や大人の玩具も、リアル女子小学生と住むのにあつてはいけない物なのでは。そう悟った稀阿は小さく頷くしかない。

「ぐ……わかったよ。俺も小学生と一緒に暮らす以上、責任あるから……華乃ちゃんの見も取り入れる。禁煙も……する。エロ雑誌もエロ漫画も買わない。辛いけど……頑張ってみる」

「それがいいよ。健康第一だよ。エロも卒業——」

「——でも、雑誌とDVDだけは、いや、せめて雑誌だけでも返してもらえないでしょうか?」
半分懇願するように両膝ついて、ソファーに座る華乃に獅噛みつくが。満面の笑顔の華乃が見つめてくる。けど、その瞳が全然笑っていない事に気が付いた。やがてその眼差しは半眼ジ

ト目になり稀阿を見下すように見つめてきた。その目が冷たい輝きを瞳の曲面に走らせて、稀阿の背筋がゾツとする。そしてこういうのだ。

「ダメ。絶対ダメ。華乃の裸でガマンして。本当はそれでも問題なんだからね。それにこんなのが部屋にあったら、華乃、学校で口滑らせるかもしれないよ。小学校の担任の海道先生は、担当のクラスの女子と同年齢の子が出るエッチなロリコン雑誌と漫画やDVDの収集家。そんなの、噂になってPTAに知られたらどうするの？ 社会的に終わるよ？ だから華乃が預かる。これ決定」

冷たい声だった。それに背筋に鳥肌を立てた稀阿は、遂に項垂れた。

「う……た、確かに……徹頭徹尾、華乃ちゃんの言う通りかも……わか……わかったよ」

ガクリと力無く崩れる。

「それじゃ、お風呂先に入って来るから、あとで背中流しに来てね。安心しろリアル小学生、華乃の胸くらいなら見てもいいから。やったじゃん小児性愛者」

そう言っ、再び部屋に戻ると、パジャマを持って脱衣所に向かう。

その間、稀阿は背中を丸めて、しおしおしながら背広を脱いで床に放ろうとしたが、思いとどまり、いつの間にか壁にかけてあった——たぶん華乃が用意してくれたのだろう——ハンガーに掛ける事にした。そのままこっそり華乃の部屋を覗くが、もうエロ雑誌の類は隠されてしまっ、どこにもなかった。背中を丸めた稀阿は姉の遺影に焼香すると。

「姉さん……華乃って……すごいね」

そうぼつりと漏らすのだが。

「稀阿、背中」

風呂場から声が響いて来た。

異様に疲れた身体で脱衣所に向かい、服を全部脱ぐと風呂場に入る。するとシャワーを頭からかぶって背中を向ける華乃が、泡だらけの手拭いを後ろ手に差し出してきた。それに稀阿はシャワーを止めて、華乃の背中を洗っていく。

昨日は緊張のあまり気づかなかったが、改めて背中を洗うと、彼女はとても小さく、華奢で、それでいて腰つきは魅惑的で。思わず生唾を飲み込んでしまう。

「ねえ」

「うん？」

「リアル女子小学生の裸みて、勃起した？」

「してないよ!？」

何て事を言うんだこの子は!?——そう思いながらも背中を洗い、腕をあげさせ腋も洗い。髪を洗おうとしたところで、座ってる椅子をずらして華乃がいきなり背中を稀阿の懷に押し付けてきたのだ。

「どや？ これが本物のジュニアの身体の感触だぞ」

「え、うお、ちょ、やわらか!？」

「ふふ、ね、もうあんな雑誌いらないでしょ。華乃がいるんだから。これからは華乃の身体で満足しちゃえ」

そして華乃が振り返っていく。

小さな膨らみを持つ乳房、子供特有の色素の薄い乳首。それらを泡だらけにしながら全身を見せつけてくる。

「ほら、見れたでしょ？　ね、前も洗っていいからさ」

「こ、これが生のジュニア……」

「感動してないで、さ、洗って……」

稀阿の両肩に手を乗せる華乃が、年不相応な妖艶な微笑みで眼差しを細めていく。それに稀阿は震える手で、華乃の肩から洗っていく。

「胸も洗って」

「……え、う、嘘……」

「でもタオルだと乳首痛いから、掌に泡付けてそのまま洗ってほしい」

本気か!?　いいのか!?　混乱する頭で掌に石鹸を持って泡立てていくと、稀阿は恐る恐る華乃の胸を触った。

小さいながらも柔らかい感触。初めて触る女性の胸。

円を描くように優しく、そして乳首も擦っていくと……。

「……ん……」

華乃が艶ある吐息を漏らした。それでも稀阿稀阿は胸を揉むように洗っていく。

「稀阿……童貞でしょ」

「な、なんでそれを!？」

「だって、胸ばっか洗ってるんだもん。興味ありすぎ。誰だって気づくよ」

「……」

そのまま胸から腹を洗い、差し伸べてくる両腕を洗い、すると、華乃が仰け反るように体勢を倒し、椅子から床に降りて太腿を開いていくのだ。ただ、そこは泡だらけで稀阿にはよくみえない。それを知ってか知らずか、華乃は扇情的な艶ある表情で見つめ、そこにくぎ付けになる稀阿の前で——いきなり太腿を締められた。

「だーめ、ここはまだ……見せてあげない」

くすくす微笑む華乃なのだが、その微笑みが余りに妖艶で稀阿はつい見惚れてしまう。

「ねえ……髪、洗ってよ」

そのまま再度椅子に座る華乃。その頭部に買ったばかりの女性シャンプーを付けて長い髪を洗っていく。そして洗い流すとリンスも使い、撫でるように洗って、華乃に腕を引っ張られ、誘われるように二人で湯船に浸かった。

いつの間にかお約束になった、二人だけの秘密の行い。

華乃が呻くが、構わず舌で洗っていく。

「……中も……お願い……」

そして、ピチャピチャと音を立てながら舐めつづける。

て、執拗に舐めつづけた。

華乃がうなされたように言葉を放つ。

お湯とは違う湿り気が舌を濡らす、それでも稀阿は舐めるのを止めない。

それでも稀阿は舐め続け、華乃が息を荒げて、身をよじり続ける。

埋没させる。それでも稀阿は舌を止める事無く動かし続け。

悲鳴のように声を上げる華乃を知りつつも稀阿は止めず。華乃から溢れてくる液を啜り始めた。

「駄目、駄目、稀阿、みちやだめええええええええええ」

顔にもろに浴びるそれを気にせず、まだ執拗に舐め続けていく。

そこでさらに痙攣させ、声にならない声をあげる華乃が、ぐったりとしながら四肢を投げ出す。そんな彼女を執拗に舐め上げ、華乃が涙目になって身体を弾けさすように再度背中を仰け反らせて痙攣したところで彼女を抱き上げた。半開きの口から涎を垂らし、放心状態の華乃を抱いたまま二人で湯船に浸かっていく。

胸にしなだれかかり、甘い吐息を吐く華乃の額に口づけをすると、華乃が面貌を朱に染めた。

「華乃……可愛いしな……俺、お前に夢中になってるのかもしれない」

その言葉に華乃は、一度喉を鳴らし――

「稀阿……。華乃ね……。稀阿のお嫁さんになりたい」

「え!？」

その言葉に赤面する彼女は、それ以上何も言わず。ふらつきながら湯船から立ち上がり、よろろと風呂場から出ていく。一人残された稀阿は身体を洗うと、さっきの華乃の言葉を想いながら「子供の……。冗談……。だろ?」そう結論をつけて少し温まってから湯船をでた。

パジャマに着替えてリビングに行く、ソファーには放心した華乃が座っていた。

稀阿は冷凍庫からアイスを出して頬に当ててやる。

「きゃ!？」

「アイスでも食べたらどうだ?」

「うん、ありがとう」

隣に座ると受け取る華乃が稀阿の肩に身を寄せて来た。

そのまま棒アイスを舐め続け――

「稀阿、さっきあそこ大きくなってた」

「ぶっ!？」

「凄く大きかった……。オオサンショウウオみたいだった。あれが……。将来、華乃の中に……」

「ちょ、ちよつと、そんな事考えちゃいけません」

そこで華乃は、突然ケラケラと笑い出した。

「冗談言っていないで、夕飯にするぞ」

「はい」

華乃は勢いよくソファーから飛び降りるとキッチンテーブルに向かう。その後、稀阿はキッチンで用意してた料理を並べて、二人で頂いた。

「そうそう、稀阿のロリコンジュニアアイドル雑誌と、ロリエロ漫画。あとオナホール。あれ全部ベランダで燃やしたから」

「……は?」

「燃やしたから」

そこで稀阿は蒼褪めていく。

蒼褪めるどころか――

「はii!？」

絶叫する。そんな稀阿をよそに、華乃は茶を啜っていく。

「う、うそ、うそですよ、華乃さん!？」

「もう稀阿には華乃がいるんだから、ジュニアアイドル雑誌はいらないでしょ。エロ漫画みたいな事だって華乃にしてるんだから、あれも必要なし。オナホールは小学生教師が所有してい

いものじゃないでしょ。アカネが来た時だって、みつきりそうだったんだからね。誤って誰か呼んだ時、見つかったら大騒ぎどころの騒ぎじゃなくなるよ。小学校教師が、小学生にやらしい事する漫画を愛読、オナホールで処理——それだけで、PTAの会議に掛けられちゃうよ！だから燃やした」

「お、俺の、俺のお宝が……」

「ジュニアの裸みたかったら、華乃の胸見せてあげるから卒業しなさい！」

ピシヤリと言いつけられて一切反論できない稀阿は、そのままテーブルに突っ伏すのだった。

そして次の日。

また夢の中で、口の中を何かがまさぐるような感覚を受けた。

それは前よりなめらかで、舌が絡められ……

そこで稀阿は目が覚めた。すると目の前に華乃の顔があった。

「え、あれ、華乃、おは……よう」

「お、おはよう稀阿、朝ごはん作ろうと思うんだけど、見てくれる？」

ただ、言葉の途中、唇から糸のように唾液が垂れ、それに気づいた華乃が慌てて袖で拭うのだ。その意味が解らず、寝ぼけ眼で起き上がる稀阿が部屋着に着替えると、華乃と一緒にキッチンに立つ。今日はベーコンエッグにするか。そう思いながら、作り始めると、途中から華乃が変わって、ベーコンを上手に焼いていく。

そして二人分作ったら、稀阿は紅茶のティーパックで二人分用意してたのだが。突然華乃がパジャマを脱ぎ捨て、スポブラとパンツ姿になると「稀阿、スマホで写真撮って」そう言い出したのだ。訳は分からなかったが、華乃をスマホに映すと、華乃が腋を見せるように髪を掻き上げ妖艶な微笑みを浮かべ——それを映す。

「これで今日のおかずにこまらないでしょ」

「ちょ——」

「あ、消しちゃダメだからね！ 雑誌取り上げちゃったから、その代わりに、と思ってね」
そのままくすくす笑いながら部屋に入り、制服姿になった華乃が出てくると朝食を頂いた。
そしてソファで華乃の髪を梳くのだが。

「あーあ、稀阿と登校できないし、なんかつまんない。華乃も休もうかな」

「こらこら、ダメだぞ。ちゃんと学校いきなさい」

「ぶー」

髪の手入れが終わると華乃は「ありがとう」と礼を述べてトイレに行き、「稀阿、一時間は——」「——入っちゃダメ、了解してます」「よろしい」大きく頷く華乃に溜息を吐いていると、嬉しそうに洗面所へ向かい歯を磨く。そして部屋に戻り雪絵の遺影に焼香するのだが、一緒に

焼香する稀阿は、気になって華乃の横顔を覗き見る。

そして——やはり、凄い真剣だ——華乃の雰囲気が変わっていた。眉尻を上げて、何か決意したような表情で眼差しを閉ざし、ただただ真剣に祈る華乃を見た。

何を祈っているのだろう——少し怖い気配を放つ華乃が気にはなるが、問いかけれぬまま焼香が終わる。そして華乃はランドセルを背負い。軽やかに振り返って、先までの表情を払拭、微笑みを向けて来た。

「それじゃ、行ってくるね稀阿」

「ああ、車に気を付けてな」

「わかってるって。それより華乃がいないからって、だらけた生活しないでね。煙草も禁止だからね」

「解ってる。それは約束だからな」

「うん、それに明日の土曜日、休日だからお買い物いくんだよね」

「ああ、華乃のベッド見に行かないと」

「あ、ベッドはいらないかも、畳で寝るの慣れちゃったし。部屋狭くなるし」

「え、そうなのか？」

「代わりにタンスがほしいな。下着とか積み重ねてる状態だから……ぜひ、可愛い欲しい！」

「わかった。タンスと日用品、あと服と靴を買いに行こう」

「やった。約束ね。それじゃ行ってきます——って、あ、ちょっと屈んで」

そう言って華乃は、稀阿を屈ませると、稀阿の頬にキスをしたのだ。

「え？」

「んふ」

そのまま微笑む華乃が、扉を抜けて学校へ行ってしまう。

「……あいつ……俺の事……」

そんな想いにかられながら、稀阿は頭を掻きながら洗濯から始めるかと家事に取り掛かるのだった。

そして、昼が過ぎ……

「もう皆給食の時間だな……。俺はどうするかな。今日はカップメンでいいか」
お手軽にお湯を注いで作ると、テレビをみながら啜っていく。

そしてうとうとし始め——そのまま眠りにつくと。

「あー、お昼カップメンで済ませてるよ!？」

時刻は午後三時三十分、華乃が帰宅していた。

「あれ、華乃、もうそんな時間か……」

「ちょっとお昼手抜きしすぎでしょ！　　というかカップメンって身体に悪いんだよ！　食べちゃダメ！」

「えー、お手軽なのに……」

「ちょっとアカネからも、皆が見てないとだらけきってる先生になんか言ってやって」
そこで華乃の後ろに、ガーゼを顔に巻き付けた日野森がいる事に気づいて、意識をはっきり取り戻した。

「お、日野森か」

「え、あ、海道先生、め！」

日野森にまで怒られた。――そんなにダメか、カップメン……。そんな事を思いながら。

「日野森も来てたのか。どうだ、家の方は、大丈夫だったか？」

慌てて起き上がって訊くと、日野森は優しく微笑んで。

「はい、全部先生のおかげです。今日はその報告にきました」

「上手く行ったのか？」

「はい、パパも今日から職業安定所に通って、お仕事を探すそうです。髪も黒く染めて、本気になってくれてます。ママも応援するって言ってくれて。それに私やママを殴った事も何度も謝ってくれました。身体の痣の事もあるので、明日、パパとママと一緒に、先生と一緒にいった総合病院へ行く事にもなってます」

「そうか……そうか……本当によかったな」

無事解決した。それが解ってさすがの稀阿も安堵する。自宅謹慎になってはしまったが、結果的には万事解決と言っているのではないか。そう思えて、稀阿は思わず涙が零れそうになるが、それを隠すように日野森の頭を撫でまわした。

ただ、そこで日野森の声が落ちてしまう。

「でも……私達家族のせいで、先生が……学校にこれなくなっていました……」

「ああ、いいんだ。日野森のパパに暴力振るった事は間違いないからな。学校側も体裁を取り繕わなければならないんだよ、一応、名門の私立の小学校だからね。一週間反省しろって事だし。でもこうなる事は覚悟してたから、むしろ一週間お休み貰ってラッキーかなって」

そこで日野森が明るい顔を見せ、クスリと笑った。そこで華乃が言葉を挟んできた。

「でもさー、担当が佐藤になってから、毎日宿題攻めになったよね。しかも全教科」

「あ、うん。華乃ちゃんも思ったんだ。宿題の量、いくらなんでも多いよね」

「そんなに出不出されてるの？」

「休日土日の二日あるじゃん。その分だって全教科から出すんだよ。あの婆」

「こらこら、婆はダメだろ婆は……」

「稀阿だってそう思ってるくせに」

笑う日野森は、やがて深々とお辞儀をした。

「海道先生、本当にありがとうございます。教室に戻ってくるのを待ってますね」
そう言って、彼女は帰っていった。

「良い子だな、あいつ」

「うん。大人しいけど、良い子だよ。友達になれてよかった」

華乃もまんざらではないと言った表情で、頷くと、ランドセルを自室に置く。

そしてだぼだぼのジャージ姿でリビングに現れると。

「ねえ、稀阿。稀阿が今日いなかった分、お風呂で身体いっぱい洗って欲しいんだけど」

「それはかまわないが、もう入るのか？」

「まだ入らないよ。宿題しないといけないし」

「そうか、それじゃ湯船は洗ってあるから、お湯だけいれておこな」

稀阿は立ち上がり脱衣所に向かう。そのまま風呂場に入りお湯を張っていくのだが。

リビングに戻ると、テーブルの上に教科書と問題集を広げて、ノートに書き写してる華乃がいた。脇には今日の時間割にあった教科全部の教科書が積み上がっている。

「本当に宿題だらけにしてるんだな。あの主任は……」

冷凍庫から棒アイスを取り出し、華乃に渡すと、隣に座り込んで覗いてみた。

「まったく冗談じゃないよ。あれ、休み中遊ばせない気だよ」

アイスを舐めながら次々問題を解いていく華乃。

その途中、華乃が舐めてたアイスを稀阿に向けて来た。

「はい。一舐めさせてあげる」

稀阿はノートを見ながら首を伸ばし、無意識にそれに一舐めするのだが。

——あれ、これ、間接キス？

そんな事が脳裏を過った。華乃をみたら、気にしないのかそのまま舐め続けている。

華乃は優秀で勉強の事で訊いてくることは無く、次々問題を解いていく。この調子なら夜のうちに全部終わるのでは、そう思って隣で稀阿も問題集を取り出し、小テスト用に付箋を貼っていくのだが。気づけば十七時を回っていた。

「さて、あらかた片付いたし——お風呂、入っちゃおうかな」

そう言って、教科書や問題集を片すと、華乃は部屋に戻り、遺影に焼香を上げてから、パジャマを抱えて脱衣所に向かった。

稀阿も教科書をかたして、ソファでダレしていると、風呂場から華乃の声が響いて来た。

「稀阿、背中お願い」

「おお、今いくー」

これもお約束になってきたな。そう思いながら脱衣所で服を脱ぐと稀阿は風呂場に入っている。風呂の腰掛けに座りながらシャワーを浴びて背中を見せる華乃が、泡だらけの手拭いを後

ろ手に差し出してくる。それを受け取り、いつものように背中を洗うと。今度は身体ごと振り向いて来た華乃の乳房を泡立てた掌で揉んでいく。

洗うたびに身を振る華乃。だがやがて熱い吐息を漏らし、稀阿も下半身に力が入る。が、それを我慢して、ただただ執拗に洗い、華乃が瞳を潤ませ始め、「……………ここ、そろそろ……………お願い……………」太腿を広げて来た。

露わになる恥部に泡が落ち、それを掬うかのように稀阿が頭を埋めて、恥部を舐めていく。体育で蒸れた少女の秘所を鼻孔に吸いながら、執拗に舐め上げ、華乃がその舌技に身体を苦悶によじつて身を避けようとするが、華乃を横倒しにして、両足を両肩へかけて逃げられないようにすると、再び舐めはじめた。

「……はあ……はあ……」

華乃の息が荒くなり、そして身体を——「!?」——ビクンと痙攣させた。

それは激しい痙攣を起こし、恥部から液が吹き出し、稀阿の顔を染めるのだ。

「……き、稀阿——」

「いいんだ。気持ちいいんだろ？」

それに華乃が面貌を朱に染め、こくと頷く。

そのまま痙攣する身体を舐め続けて、

「華乃、ちよつと指入れていいか？」

「え！」

驚く華乃を引っ張り上げて背中を稀阿の胸元に寄りかかせると、稀阿は後ろから、華乃の秘部に指を差し入れた。

「……あ」

華乃が甘い声を上げる。

そして中を指先で洗い続け、華乃の股の小さな豆、その裏側を弄った時、「んん！」華乃が一際身体を震わせ、中を強く締めて来た。ここが弱いのか——と理解した稀阿はそこを執拗に撫で上げる。

「あ……ああああ。あああああ……稀阿、稀阿、まって、そこ、そこは!」

「ここ、弱いんだろ？」

「わからない、わからないよ。でも、痙攣が、痙攣が」

うわごとのように呟く華乃が顎をガタガタ言わせて、痙攣し、そのまま弄ると、足で身体を支えると、そのまま異常に震えだして、再び華乃が液を恥部から大量に噴出した。と、同時に「や、みちやだめ、だめええええええええええええええええええええええ」黄金色の液まで漏らし始めた――

「あああああああああああああああああああああああ」

ガクガクと身体を、下半身を揺する涙目の華乃の頬に、稀阿は口づけをする。

華乃は虚ろな瞳で、稀阿の項に腕を回すと、華乃からも稀阿の頬に口づけをした。そして、互いの唇が接近し——その瞬間だった。

——ピンポーン！

呼び鈴が、鳴ったのだ。

ビクッと身体を震わせ、冷静になる二人。

——いま、勢いに任せて華乃の頬に口づけしちまったぞ!? それどころか唇に——
姪なのに、今、俺は彼女を女としてみていた……。

その思考が稀阿の胸を緊張で高鳴らせる。

そして互いで互いの頬に口づけをした事を悟り、面貌を朱に染めるが。

その間にもピンポーン！ ピンポーン！ と呼び鈴が鳴り続けた。

「誰か……来てるみたいだな」

「ほっとうよう……」

そう言つて、黄金色の液体で塗れた下半身をお湯で流すが、いつまでも呼び鈴は鳴りやまない。やがて、華乃の眼差しが半眼になり、落ち着かないのかそわそわして——

ピンポーン！ ピンポーン！

「あーもう五月蠅い!？」

突然華乃が身体を振り、震えながら立ち上がるとシャワーを浴び、意識をはっきりさせると勢いよく風呂場を飛び出していった。

「ちょっと出てくる！」

バスタオルを身体に巻きつけ、そのまま玄関に向かう。

そして稀阿は、まあ華乃なら上手く対応するだろうと思い、湯船に浸かっていくのだが。何か喚く声が聞こえて来たのだ。

「間にあつてますから！ 結構ですから！」

『——!？』

外からも何か騒ぐ声が聞こえてくる。

「間に合ってますから！ 結構ですから！ とうかいらないですから！」

華乃が同じ言葉を繰り返している。

なにかあったか——まさかこのご時世に押し売りや勧誘はないと思うが、しつこいセールスがきているのかもしれない。そう考え、稀阿もタオルを腰に巻きつけ玄関に向かうと。

「結構ですから！ お帰り下さい！ 稀阿はただいまでかけてますから！」

「なに、してるんだ？」

華乃が叫びながら今にも開きそうな半開きの玄関扉を開かないように力任せに引っ張ってい

